

# 『大阿弥陀経』 訳注（九）

辛 嶋 静 志

はじめに

今回訳出したのは、『大阿弥陀経』下巻、大正蔵第12巻、312c27-313b25であり、いわゆる「三毒段」と「五悪段」の間の部分にあたる。次のような内容からなる。

## 釈尊を讃嘆し敬う

上で仏が「三毒」について説き、それを聞いた阿逸菩薩は、仏の徳を讃嘆し、仏を敬い、「阿弥陀仏」という名前を仏から聞いたことを喜ぶ。

## 仏を敬い、念ぜよ

仏は阿逸菩薩が仏を敬い念じることを喜び、仏の徳を自讃する。

## 阿弥陀仏の名を聞き、輪廻を厭い、心身を清めよ

衆生が無数劫以来輪廻して来て、今日仏に会い、やっと「阿弥陀仏」の名前を聞くことができたからには、輪廻を厭い、心身を清め、精励刻苦して、阿弥陀仏国へ生まれる基本を整えよ、と仏は語る。

## 阿弥陀仏国に生まれて、苦しみ・煩惱を離れる

一瞬にすぎないこの人生の間に善業をなし、来世に阿弥陀仏国に生まれて、苦痛・煩惱を離れて、永久（とわ）に快樂に暮らすことを説く。

## 阿弥陀仏国は涅槃の境地に近い

阿弥陀仏国では、好きなだけ長生きでき、自由に食べ物が現れ、まるで涅槃の境地のようだという。

## 疑いをもつな

阿弥陀仏国に生まれようと願い求めよ。疑いや後悔を懐いて、仏国辺地にある七宝の城（いわゆる「疑城胎宮」）で五百年留まらなければならないような結果を招かないようにと、仏は語る。阿逸菩薩は「疑いなぞ懐くはずがありません」と答える。

底本には高麗蔵再雕本を用いた。注では、本経の読みと、『平等覚経』と訳者不明『無量寿経』との読みの違いを逐一指摘した。

三毒・五悪段の語彙・語法は、支婁迦讖や支謙の時代、すなわち二世紀後半から三世紀のものであることは間違いない。常識的には、『平等覚経』の訳者（支謙）が『大阿弥陀経』のこの部分を踏襲したと考えられる。しかし、次の様な可能性も否定できない。(1) 二世紀後半に支婁迦讖によって『大阿弥陀経』が訳出された後に、ある人物が三毒・五悪段を訳し（或いは作文し）、それを『大阿弥陀経』に挿入した。『平等覚経』もそれを踏襲した。(2) 三世紀に支謙訳『平等覚経』で三毒・五悪段が初めて訳され（或いは作文され）、それが『大阿弥陀経』にも挿入された<sup>1)</sup>。(3) 『平等覚経』が訳出された後、時をあまり隔てずして別の人物が三毒・五悪段を訳し（或いは作文し）、それが『大阿弥陀経』と『平等覚経』の両方に挿入された。

筆者は目下、主に支婁迦讖訳『道行般若経』と支謙訳『大明度経』を材料に、この二人の訳者の訳経經典の語彙・語法の比較研究を進めている。この研究が完成した上で、改めて、三毒・五悪段の訳者（あるいは作者）が誰であるのか検討したいと思う。なお、仏典の語彙・語法の比較研究においては、踏襲されやすい仏教語彙を対象にするのではなく、「わたし（たち）」「あなた（たち）」「すべて」「すべき」「はなす」「泣く」という様な訳者個人の時代・地域が反映される常用詞の比較が重要なのである。仏典を材料にした常用詞の研究は、主として中国の漢語史研究者が、近年めざましい成果を上げている。この方面の研究が進めば、三毒・五悪段がいつ書かれたかを明らかにすることができるかも知れない。

さて、今回訳出した部分に対応する『平等覚経』では、大正蔵本の底本である高麗蔵再雕本と宋版・房山石経本・聖語蔵本との間で読みが相違している場合が少なくなかった。そしてその場合、高麗蔵再雕本の読みは、『大阿弥陀経』のそれに概して一致している（注44, 69, 71-75, 77, 79, 83, 85, 91, 94, 96, 97, 99, 100, 106, 109参照）。残念ながらこの部分、高麗蔵と同じく開宝蔵の系統に属する金蔵本が欠けている。また最近存在が明らかになった高麗蔵初雕本の読みをまだ確認できていない。高麗蔵再雕本（あるいはその元になった版本）の編者は、この部分、『大阿弥陀経』の読みを参照にして、『平等覚経』本来の読みを変えた可能性を否定できない。

また『無量寿経』の三毒・五悪段は、明らかに原典からの翻訳ではなく、漢訳古訳のその翻案である。おそらく、『大阿弥陀経』ではなく、『平等覚経』の読みに基づき（注4, 5, 24, 27, 44, 56, 71参照）、それに見える難解あるいは（『無量寿経』の訳者から見

1) (2)に類したことが鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』で起きている。その『普門品』の偈頌は羅什訳（406年訳出）には本来なく、601年に訳された『添品法華経』から挿入されたものである。詳しくは拙論“The Omission of the Verses of the *Samantamukha-parivarta* in a Kanjur Edition,”『創価大学国際仏教学高等研究所年報』11（2008）, p.373f. 参照。

ると) 古風な表現を、より分かりやすい表現に置き換えたり、四字句表現をより徹底し、読みやすくしている。従って、『無量寿經』の三毒・五悪段は、『大阿弥陀經』・『平等覺經』の読みを参考にして、はじめて前後関係が理解出来る場合が少なくない(注101参照)。

原稿に目を通して、誤りを指摘して下さった佐々木大悟氏に深く感謝致します。

## 和 訳

(大正蔵第12卷, 312c27~313b25)

### (釈尊を讃嘆し敬う)

阿逸菩薩が膝立ちし合掌して申し上げた<sup>2)</sup>。

「仏は威厳があり、とても尊い。説かれる教えはすばらしい<sup>3)</sup>。私たちは、教えのお言葉を聞いて<sup>4)</sup>、それらがみな心にぴったりきます<sup>5)</sup>。世間の人は実にその通りで、仏の仰る通りで、相違ありません<sup>6)</sup>。いま仏は(313a) 私たちを哀れんで<sup>7)</sup>、大いなる道を示され<sup>8)</sup>、生きる道を語りお教え下さった<sup>9)</sup>。(お蔭様で) はっきり見聞きできるようになり、永遠に度脱を得ました<sup>10)</sup>。いままるで生まれ変わったかのようです<sup>11)</sup>。<sup>12)</sup> 私た

- 
- 2) 阿逸菩薩長跪叉手言 『平等覺經』(以下『平』と略す)(294c13f.)は同じ。『無量壽經』(以下『無』と略す)(275b9)では「彌勒菩薩長跪白言」と変えられている。「長跪叉手」は訳注(一)注(9)参照。
- 3) 所説經快善 『平』(294c14)も同じ。『無』(275b10)では「所説快善」と変えられている。「經」は「教え」の意味。訳注(一)(19), Krsh (2010) 当該項を参照。「快善」は訳注(一)注(18)を参照。
- 4) 我曹聽佛經語 『平』(294c15)には「我曹聽佛經語」とある。『無』(275b10)では「聽佛經語〔v.l.〕←者)」と変えられている。『無』の読みは『平』を踏まえている。
- 5) 皆心貫之 『平』(294c15)には「皆心貫思之」とある。『無』(275b10)では「貫心思之」と変えられている。『無』の読みは『平』を踏まえている。
- 6) 如佛所語無有異 『平』(294c15f.)は同じ。『無』(275b11)では「如佛所言」と変えられている。
- 7) 今佛慈哀我曹 『平』(294c16)は同じ。『無』(275b11)では「今佛慈愍」と変えられている。
- 8) 開示大道 『平』(294c16)の高麗藏再雕本・宋版には「開視天道」とあり、房山石經本には「開示天道」、元・明版には「開示大道」とある。『平』の「天道」は「大道」の誤写。同じ誤りは『平』の別の箇所にもある。訳注(八)注(91)を参照。『無』(275b11)では「顯示大道」と変えられている。
- 9) 教語生路 『平』(294c17)は同じ。『無』(275b11)では省かれている。「教語」は訳注(八)注(99)を参照。「生路」はここでは「生きる道」の意味。この意味は辭書類に採られていない。HD.7.1511a参照。
- 10) 耳目聰明、長得度脱 『平』(294c17)は同じ。『無』(275b12)では「耳目開明、長得度脱」と変えられている。
- 11) 今若得更生 『平』(294c17)には「若得更生」とある。『無』(275b12)では省かれている。
- 12) 我曹聽佛經語、莫不慈心歡喜踊躍開解者。及諸天・帝王・人民・蜎飛蠕動之類皆蒙恩、無不解脫憂苦者 『平』(294c18f.)には「……開解者。我曹及諸天・帝王……」とあり、「我曹」が加えられている。これは誤り。『無』(275b12f.)では「聞佛所説、莫不歡喜。諸天・人民」

ちは、仏の教えのお言葉を聞いて、誰もが(仏への)敬愛の心をもって<sup>13)</sup>踊らんばかりに歓喜し、はっきり理解しました<sup>14)</sup>。神々・帝王・人々・飛ぶ虫・這う虫など(一切衆生)<sup>15)</sup>までみな恩恵を蒙り、苦悩から解脱しないものはいません。

仏の語られた教えと戒めはとても奥深く、とても良く、はてなく、極みがありません<sup>16)</sup>。仏が智慧で見知られる<sup>17)</sup>八方上下、過去・現在・未来のことがらは<sup>18)</sup>、縦横無尽です<sup>19)</sup>。仏は大変(出会い難しく、教えはとても)聞くことが得難いものです<sup>20)</sup>。私たちはみな仏を敬愛しています<sup>21)</sup>。いま私たちが度脱することができたのは<sup>22)</sup>、すべて仏が前世でさとりを求めておられた時<sup>23)</sup>、刻苦して学問をなされ、ひたむきであられたお

↘・蠕動之類皆蒙慈恩、解脱憂苦」と変えられている。

- 13) **慈心** 『平』(294c18)は同じ。『無』(275b13)では「皆蒙慈恩」と変えられている。この「慈心」は『無』の訳者が誤解したように、仏の「慈悲心」ではない。衆生の仏に対する「敬愛、尊敬の念」の意味である。「慈」は古代漢語でも時々「父母に対する孝敬」の意味で使われる。HD.7.647a(4)には「莊子・漁父」「事親則慈孝」、『礼記・内則』「父子皆異宮、味爽而朝、慈以旨甘。」に対する後漢代の鄭玄の注「慈、愛敬進之也。」、また南宋代の王昶麟『困学紀聞・左氏傳』「子之於親亦曰慈」を引いている。「孝敬、敬愛する」の意味の「慈」「慈孝」「慈心」は支婁迦讖訳の『道行般若経』やそれを踏襲した支謙訳『大明度経』に多出する(Krsh [2010] 当該項を参照)。例えば、『道行般若経』大正8巻, No.224, 477c14f.「佛語阿難:“汝敬我所語、敬我法。若敬愛承事我。汝自敬身於佛。汝有慈於佛。汝有孝於佛、一切恭敬於佛所。汝持是慈孝恭敬於般若波羅蜜中。如是、阿難!汝恭敬於是中、悉爲供養諸佛已。……”」同468c20f.「今佛現在。有慈心佛恩德、欲報佛恩、具足供養者。汝設有慈心於佛者、當受持般若波羅蜜、當恭敬、作禮、供養。……汝慈孝於佛、恭敬、思念於佛、不如恭敬於般若波羅蜜。』。本経でも、「我曹皆(←比)慈心於佛所」(313a07)、「佛告阿逸菩薩:“若言是實當爾。若有慈心於佛所者、大喜。實當念佛。……”」(313a16f.)、「佛言:“師開導人耳目、智慧明達度脫人、令得善合泥洹之道。常當孝慈於佛(v.l. 佛如)父母、常當念師恩、常念不絕、即得道疾。”」(317c12f.)と出る。最後の例の「孝慈」は明らかに仏を父母同様に「敬愛する」ことを示している。
- 14) **開解** 訳注(一)注(5)、Krsh(2001).151を参照。
- 15) **蝸飛蠕動之類** Skt. *sattva* (衆生)の訳。訳注(一)注(14)を参照。
- 16) **佛語教戒甚深善、無極無底** 「教戒」は宋版・房山石経本などには「教誡」とある。「甚深善」は宋版などには「甚深甚善」とある。『平』(294c20f.)には「佛諸(「諸」は「語」の誤写)教戒甚深、無極無底」とある。『無』(275b14)には「佛語教誡(v.l. 戒)甚深甚善」とある。この読みは本経に近い。「教戒」はHD.5.446bに『呉子』などでの例が挙げられている。同義の「教誡」はHD.5.450bに『風俗通』などでの例が挙げられている。
- 17) **佛智慧所見知** 『無』(275b14)では「智慧明見」と変えられている。
- 18) **八方上下去來現在之事** 『無』(275b14f.)では「八方上下去來今事」と変えられている。
- 19) **無上無下、無邊無幅** 「幅」は「はて」の意味。訳注(七)注(57)を参照。『平』(294c22)には「無上無邊幅」とある。『無』(275b15)では「莫不究暢」と変えられている。
- 20) **佛甚難得、值、經道甚難得** 聞 「值、經道甚難得」は『平』(294c22f.)により補う。『無』(275b15)ではこの一文が省かれている。この文は、本経のすぐ後に「今我曹得與佛相見、得聞阿彌陀佛聲」(313a14f.)とあるのと対応している。
- 21) **我曹皆(←比)慈心於佛所** 『平』(294c23)により「比」を「皆」に改める。「於…所」は「…に対して」の意味。Krsh(2001).434, Krsh(2010) 当該項を参照。「慈心」は注(13)参照。『無』(275b15)ではこの句が省かれている。『無』の訳者が「慈心」(敬いの心)の意味を理解できず、削った可能性がある。
- 22) **今(←令)我曹得度脫者** 『平』(294c23f.)の高麗蔵再雕本には「今我曹得度脫者」とあり、その他の諸本には「念我曹……」とある。『無』(275b15)では「今我衆等所以蒙得度脫」と変えられている。本経の「令」を『平』・『無』により「今」に改める。
- 23) **皆是佛前世求道時** 『平』(294c24)と同じ。『無』(275b16)では「皆佛前世求道之時」↗

蔭です<sup>24</sup>)。 (仏の) 恩徳は万物に行きわたり、なされた福德 (の結果である) 福々しいお姿はととてもすばらしい<sup>25</sup>)。 光明は輝きわたり、遮るものなくどこまでも照らし<sup>26</sup>)、涅槃 (の世界に) まで貫き入る<sup>27</sup>)。 (仏は) 教えを授け、(すべてを) つかさどり<sup>28</sup>)、(他の) 威力を制圧し<sup>29</sup>)、消し去り<sup>30</sup>)、八方上下の果てしなく極まりない<sup>31</sup>) (人々の心を) 改めさせます<sup>32</sup>)。 仏は師としての鑑であり<sup>33</sup>)、尊さにおいてあらゆる聖人を凌駕している<sup>34</sup>)、仏に及ぶ者は全くいません<sup>35</sup>)。 仏は八方上下の神々・帝王・人々の師となられ<sup>36</sup>)、彼らの願いの大きさに応じて、それぞれ (悟りへいたる修行) 道を得させます<sup>37</sup>)。

いま私たちは仏にまみえることができ<sup>38</sup>)、『阿弥陀仏』という名前をお聞きすること

と変えられている。

- 24) **勤苦學問，精明所致** 『平』(294c24)には「慊(元版・明版には「勤」)苦學問，精進所致」とある。『無』(275b16)では「謙苦所致」と変えられている。「勤苦」「慊苦」「謙苦」はいずれも「苦しみ；苦勞する；刻苦する，苦行する，頑張る」という意味。Krsh (2010)「勤苦」「謙苦」の項を参照。『無』の読みは『平』のそれを踏まえている。「精明」は「ひたむき，ひたすら」の意味であろう。訳注(一)注(107)を参照。
- 25) **恩徳普覆，所施行福德相祿巍巍** 『平』(294c25)は同じ。『無』(275b16f.)では「恩徳普覆，福祿巍巍」と変えられている。「相祿」は「姿と福祿；福々しい面相，福相」の意味であろう。HD.7.1156bには『太平廣記』での用例が挙げられている。「巍巍」は高いさま，崇高なさまを示す。本經の別の箇所に類似の表現がある：「其世間帝王・人民・善男子・善女人前世宿命作善所致相祿巍巍。」(317b21f.)。
- 26) **光明徹照，洞虛無極** 『平』(294c25f.)は同じ。『無』(275b17)では「光明徹照，達空無極」と変えられている。「洞」は「到達する，透徹する」の意味。「洞虚」で「遮るものがなく，(光が)透徹する」という意味か。HD.5.1146bには「深幽」という意味で使われた唐詩の例を引いている。
- 27) **貫入** 『平』(294c26)と『無』(275b17)には「開入」とある。
- 28) **攬典** 『平』(294c26)には「經(おそらく「攬」の誤写)典」，『無』(275b18)には「典攬」とある。「攬」(一手ににぎる)「典」(主管する)は類義語。
- 29) **制威** 『平』(294c26f.)は同じ。HD.2.664bには「權威・権力を握っている」の意味で使われた『管子』での用例が挙げられている。『無』(275b18)では「威制」と変えられている。
- 30) **消化** HD.5.1200bには『釈名』などでの用例が挙げられている。
- 31) **無窮無極** 訳注(七)注(59)参照。
- 32) **改動** 元・明・清版には「愍動」とある。『平』(294c27)には「愍動」(房山石經本と聖語藏は「改動」)，『無』(275b18)には「感動」とある。「改動」は同義語を重ねた表現。「動」にも「思想が影響を受けて改変する」の意味がある(HD.2.799a [7])。この「改動」の意味を理解できずに、「改」を「改」の誤りと見て，さらに「心」を加えて「愍」という読みができたのであろう。『無』の編者は「愍」をさらに「感」に改めたと思われる。
- 33) **佛爲師法** この「師法」はよく分からない。一応「師の模範」と解釈した。『無』(275b19)では「佛爲法王」と変えられている。
- 34) **尊絶群聖** 『無』(275b19)では「尊超衆聖」と変えられている。
- 35) **都無能及佛者** 『無』(275b19)では削られている。
- 36) **佛爲八方上下諸天帝王人民作師** 『無』(275b19)では「普爲一切天人之師」と変えられている。
- 37) **隨其心所欲願大小，皆令得道** 『無』(275b20)では「隨心所願，皆令得道」と変えられている。「欲願」は類義語を重ねた表現。Krsh (1998). 563参照。ここの「道」は，「阿那含道」「阿羅漢道」「菩薩道」など「覚りあるいは涅槃へいたる道，修行」の意味。訳注(一)注(23)参照。
- 38) **今我曹得與佛相見** 『無』(275b20)では「今得值佛」と変えられている。

ができ<sup>39)</sup>、私たちはうれしくてたまりません<sup>40)</sup>。だれもがみな智慧を得て、ものごとがはっきり分かるようになりました<sup>41)</sup>。』

### (仏を敬い、念ぜよ)

仏は阿逸菩薩に仰った<sup>42)</sup>。

「おまえの言うことは事実であり、そのとおりだ<sup>43)</sup>。おまえが仏(わたくし)に対して敬いの気持ちを持つのは、たいへん喜ばしいことだ<sup>44)</sup>。どうか仏を念じなさい<sup>45)</sup>。久しぶりにやっとまた世界に仏があらわれたのだ。いま私は(この)苦しみの世界<sup>46)</sup>で仏となり、(自ら考え)出した教義を無碍自在に教え<sup>47)</sup>、(人々の)疑いを断ち<sup>48)</sup>、心と行いを正し<sup>49)</sup>、もろもろの愛欲を取り去り<sup>50)</sup>、諸悪の根本を断ち<sup>51)</sup>、融通無碍に(世界を)歩き回り<sup>52)</sup>、智慧を把握している<sup>53)</sup>。あらゆる境涯の表裏は<sup>54)</sup>、根本を掌握するこ

39) 得聞阿彌陀佛聲 『平』(295a1f.)では「得聞無量清淨佛聲」、『無』(275b20f.)では「復聞無量壽(v.l.壽佛)聲」と変えられている。漢訳仏典では「聲」は概して梵語 *śabda* (音, 声; 名前, 名称)の訳語として使われる。ここでは「名前」の意味。

40) 我曹甚喜 『無』(275b21)では「靡不歡喜」と変えられている。

41) 莫不得點慧開明者 『無』(275b21)では「心得開明」と変えられている。「點慧」は同義語を重ねた表現。Krsh (1998).484および Krsh (2010) 当該項を参照。「點」(賢い)は古訳ではよく現れるが、羅什以降使われない。「開明」は古典から見える表現 (HD.12.47a 参照)。

42) 佛告阿逸菩薩 『無』(275b22)では「佛告彌勒(v.l.彌勒菩薩)」と変えられている。

43) 若言是實當爾 『無』(275b22)では「汝言是也」と変えられている。

44) 若有慈心於佛所者大喜 『平』(295a3f.)の高麗蔵再雕本は同じだが、他の諸本には「……大善」とある(金蔵と房山石経本はこの部分欠損)。『無』(275b22f.)では「若有慈敬於佛者、實爲大善」と変えられている。本経や『平』で「なんじ」の意味で使われている「若」は、『無』では「汝」と変えられている(例えば前注の例)。しかしここでは変わっていない。『無』の訳者は、ここの「若」を「もし」と誤解したと考えられる。「慈心」は注(13)参照。

45) 實當念佛 『無』(275b23)では削られている。

46) 苦世 『無』(275b23)では「此世」と変えられている。

47) 所出經道教授洞達 『無』(275b24)では「演說經法、宣布道教」と変えられている。本経には「其智慧教授所出經道、布告八方上下」(308c24f.)という類似の表現がある。「經道」は訳注(一)注(4)、(19)を参照。「洞達」は「スムーズに; 融通無碍に」の意味。HD.5.1147aには漢代の賦などでの用例が引かれている。

48) 截斷狐疑 『無』(275b24)では「斷諸疑網」と変えられている。

49) 端心正行 『無』(275b24)では削られている。

50) 拔諸愛欲 『無』(275b25)では「拔愛欲之本」と変えられている。「愛欲」は漢訳仏典から見える語。Krsh (1998).2, Krsh (2001).6, Krsh (2010) 当該項参照。

51) 絶衆惡根本 『無』(275b25)では「杜衆惡之源」と変えられている。

52) 遊歩無拘 『無』(275b25)では「遊歩三界、無所拘閼」と変えられている。「遊歩」は、HD.10.1050aに漢代劉向『列仙伝』などでの例が挙げられている。またHD.5.1501a.「遊歩」には『三国志』などでの用例が挙げられている。「無拘」は、HD.7.115abに宋・明代の「無拘無束」「無拘無縛」「無拘無礙」などの表現が挙げられている。

53) 典總智慧 『無』(275b26)では「典攬智慧(衆道之要)」と変えられている。「典總」は同義語を重ねた表現。HD.2.119aには宋代の用例が挙げられている。本経の「總領道智、典主教授」(309a15f.)、「典主智慧、總領教授」(309a21)という表現を参照。

54) 衆道表裏 資福蔵と積砂蔵には「衆諸表裏」とあるが誤写。『無』(275b26)では「(典攬智慧)衆道之資」と変えられている。「衆道」は「輪廻における生存の状態、境涯」と考えた。訳注(一)注(23)参照。

とで<sup>55)</sup>、すっかり明らかになる<sup>56)</sup>。(仏は)五種の境涯を明らかに示して<sup>57)</sup>、生死輪廻の道と涅槃への道とをきちんと区別する<sup>58)</sup>。』

**(阿弥陀仏の名を聞き、輪廻を厭い、心身を清めよ)**

仏は仰った<sup>59)</sup>。

「おまえたちは<sup>60)</sup>、無数劫以来、数え切れないほどの劫の間<sup>61)</sup>、菩薩道を修め<sup>62)</sup>、神々や人々や飛ぶ虫・這う虫など(一切衆生)を(輪廻から)救済しよう<sup>63)</sup>と実に長い間願ってきた<sup>64)</sup>。おまえ(たち)から(仏)道を学び、(輪廻を)度脱した人間は無数にいる。涅槃にいたる道を得るに至った者もまた無数だ<sup>65)</sup>。

おまえたちと八方上下の神々・帝王・人々あるいは比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷たちは<sup>66)</sup>、過去世から無数劫以来ずっと<sup>67)</sup>、これら五種の境涯を転々としてきた<sup>68)</sup>。(家族と)死に別れる時、互いに声を出して泣き、涙を流し、互いに恋々として<sup>69)</sup>、深く憂

- 55) **攬持維綱** 『無』(275b26)では「執持綱維」と変えられている。「攬持」は「一手に握る、掌握する」の意味。Krsh(1998).262参照。「維綱」の「維」は「繋いで物を安定させる大づな」。「綱」は「網の太い綱」。「維綱」で「大綱、要点；根本；綱紀」を意味する。HD.9.898aには『儀礼』『塩鉄論』などでの用例が挙げられている。「綱維」も同じ意味(HD.9.892b参照)。
- 56) **昭然分明** 『平』(295a8)と『無』(275b26f.)には「昭然分明」とある。「昭」と「昭」は通じる(GH.1024c, 1368a参照。訳注[五]注[110]にも「照照」と「昭昭」の交替例がある)。「昭然」は辞書類に採られていないが、「昭然」はHD.5.689aに『礼記』などでの用例が挙げられている。「分明」は古典から見える表現。
- 57) **開視五道** 宋版などには「開示五道」とある(この部分房山石経本は欠損)。「平』(295a8)には「開示五道(w.l.開示道、開視道)」。「無』(275b27)には「開示五趣」とある。「示す」の意味で「視」を使うのは古い用法。訳注(八)注(121)を参照。「開示」はKrsh(1998).251, Krsh(2001).151f.を参照。
- 58) **決正生死泥洹之道** 『平』(295a8f.)・『無』(275b27f.)も同じ。「決正」は類義字を重ねた表現。HD.5.1018bには『漢書』での用例が挙げられている。ここでは「きちんと正す」の意味。
- 59) **佛言** 『無』(275b28)では「彌勒當知」と変えられている。
- 60) **若曹** 『無』(275b28)では「汝」と変えられている。
- 61) **從無數劫以來、不可復計劫** 『無』(275b28)では「從無數劫來」と変えられている。「不可復」はKrsh(2001).417(可復), Krsh(2010)当該項を参照。
- 62) **若曹作菩薩道** 『無』(275b28f.)では「修菩薩行」と変えられている。
- 63) **過度** 訳注(一)注(36)を参照。
- 64) **欲過度諸天人民及蜎飛蠕動之類已來甚久遠** 「已來」は宋版には「以來」とある。「無』(275b29)では「欲度衆生、其已久遠」と変えられている(「其」は本経=『平』の「甚」を見誤ったか)。
- 65) **人從若得道度者無央數、至得泥洹之道者亦無央數** 『無』(275b29f.)では「從汝得道、至于泥洹、不可稱數」と変えられている。
- 66) **若曹及八方上下、諸天・帝王・人民、若比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷** 『無』(275c1f.)では「汝及十方諸天・人民・一切四衆」と変えられている。
- 67) **若曹宿命從無數劫已來** 『平』(295a14)も同じ。「無』(275c2)では「永劫已來」と変えられている。「若曹」は余分。「宿命」に関しては、訳注(一)注(96)を参照。
- 68) **展轉是五道中** 『無』(275c2)では「展轉五道」と変えられている。
- 69) **死生呼嗟、更相哭淚、轉相貪慕** 『平』(295a15f.)の高麗藏再雕本は同じだが、それ以外の諸本には「生死呼嗟」とある。「無』(275c2)では省かれている。本経(312b29f.)には「或時家室・中外・父子・兄弟・夫婦至於死生之義、更相哭淚(←泣)、轉相思慕、憂念憤結、恩愛纏續、心意著痛、對相顧戀、晝夜縛礙、無有解時。」という類似表現があった(訳注[八]、)

い愁いて、言い表せないほど苦しむ<sup>70</sup>)。(こうして)今世まで(313b)絶えず輪廻しつづけ<sup>71</sup>、<sup>72</sup> やっと今日仏にまみえ、たまたま出会えた。こうしてやっと『阿弥陀仏』の呼び名を聞くことができたのは、<sup>73</sup> とてもすばらしいことだ。わたしはおまえたちとともに喜ぶ。

(おまえたちは)輪廻の苦痛を自ら厭うべきである<sup>74</sup>)。生まれる時には、とても痛く、とても苦しく、とてもつらい<sup>75</sup>)。大きくなってからも、苦しく、つらい<sup>76</sup>)。〈飢える時も、

↘ p. 11f.)。「死生」は「輪廻する」あるいは「生と死に分かれる、幽明境を異にする、死に別れる」の意味であろう。「呼嗟」は類義字を重ねた表現。HD.3.291bには「漢書」での用例が挙げられている。「哭涙」は訳注(八)注(115)を参照。「更相」・「轉相」は「互いに」の意味。訳注(八)注(62)、(115)を参照。「貪慕」は類義字を重ねた表現。HD.10.109bには「後漢書」での用例が挙げられている。

- 70) **憂思愁毒, 痛苦不可言** 『無』(275c2f.)では「憂畏勤苦, 不可具言」と変えられている(「畏」は本経=『平』の「思」を見誤ったか)。「憂思」は古典から見える表現。HD.7.687bには『礼記』などでの用例が引かれている。「愁毒」は訳注(八)注(59)参照。「痛苦」は同義字を重ねた表現。HD.8.324bには後漢代『論衡』などでの用例が引かれている。
- 71) **至今世死生不絶** 『平』(295a16f.)の高麗蔵再雕本も同じ。『平』の房山石経本や宋版などには「至今世生死不絶」とあり、『無』(275c3)でも「乃至今世生死不絶」と変えられている。
- 72) **乃今日與佛相見共會值, 是乃聞阿彌陀佛聲** 『平』(295a17f.)の高麗蔵再雕本には「乃至今日與佛相見共會值, 是乃聞無量清淨佛聲」とあるが、『平』の房山石経本や宋版などには「今日與佛相見共會, 乃聞無量清淨佛聲」とあって、「乃至」と「值, 是」が省かれて理解しやすいし、リズムもいい。本経の「乃」よりは『平』高麗蔵再雕本の「乃至」のほうがいい。『平』房山石経本・宋版の「相見共會」だと、「相」と「共」が同義、「見」と「會」が同義の構造。「會值」は辞書類に採られていないが、同義字を重ねた表現で、「たまたま出会う」の意味。漢訳仏典には、しばしば出る。例えば、支謙訳『大明度経』大正8巻, No.225, 490b14f.「是輩人有求經不求者, 會值經法, 願不離經」, 元魏代吉迦夜・曇曜共訳『雜寶藏経』大正4巻, No.203, 474b16f.「有長者女, 早起掃地, 會值如來於門前過。見生歡喜, 注意看佛。」など。「是乃」という表現は分かりにくい。「こうしてやっ」との意味であろうか。「相見共會。值是, 乃……」(まみえ, 出会えた。これにであって, やっ)という解釈は困難。『無』(275c3f.)では「與佛相值, 聽受經法。又復得聞無量壽佛」と変えられている。
- 73) **甚快善。我助汝曹喜** 『平』(295a18)には「甚快善哉。助汝(高麗蔵再雕本以外はすべて「若」)曹喜」とあるが、おそらく「甚快善。我助汝曹喜」の誤写。『無』(275c4f.)では「快哉甚善。吾助爾喜」と変えられている。本経(317b23)には後に「(乃當聞阿彌陀佛聲者,) 甚快善。我( [= v.l.] ←哉)代之喜」という類似した表現が出、それに対応する『平』(299b25)には「(適當聞無量清淨佛聲), 慈心歡喜, 我代之喜」とある。「甚快善」という表現は、本経の別の箇所でも「今現在所居國土甚快善」(301a18), 「甚快善無比」(303c4f.)と出る。「快善」は訳注(一)注(18)を参照。「助…喜」は羅什訳以降の「隨喜」に同じく、*anumodate*の訳。「他人の行為を見て、喜び、よしとする」の意味。訳注(二)注(36)を参照。Krsh(2010)の「助歡喜」, 「助…歡喜」の項目も参照。
- 74) **亦可自厭死生痛痒** 『平』(295a18f.)の高麗蔵再雕本は同じだが、宋版などには「……生死痛癢」とある。「痛痒」は本経でも宋版などには「痛癢」とあるが、単に異体字。文字通りには「痛みと痒み」だが、梵語 *vedanā* (感受, 感覺, 苦痛)の訳語として、安世高訳以来古訳で使われる。羅什以降は「受」を使う。Krsh(2010)の「痛痒」の項目を参照。ここでは、「苦痛」の意味。『無』(275c5)では「汝今亦可自厭(生・死・老・病痛苦)」と変えられている。
- 75) **生時, 甚痛, 甚苦, 甚極** 『平』(295a19)の高麗蔵再雕本は同じだが、宋版などには「……甚痛苦, 甚極」とある。『無』(275c5)では「(汝今亦可自厭)生・(死・老・病)痛苦」と変えられている。「極」は「困」と同義で「困窮する; 困窮させる; 疲れる」の意味で、使われることが多い(GH.1125c, HD.4.1135a [14], 訳注[三]注[43]「困極」, 訳注[七]注[38]「懈極」を参照)。ここでは「痛」「苦」と類義的に使われており「つらい」の意味と解釈した。



痛く、苦しく、つらい。病の時も、痛く、苦しく、つらい。)>77) 死ぬ時も、痛く、苦しく、つらい78)。 (身は) ととても悪臭がして、不潔で、まったくいいところがない79)。

仏(わたし)は、だからおまえたち皆に言う80)。おまえたちも、自分できっぱりと臭さや汚い体液を断ち切るべし81)。おまえたちは、また、心身を正し、大いに善行をなさい82)。そこで常に(体の)内と外を整え、身体を清潔にし、(煩惱という)心の垢を洗い落とし83)、規範を守り、内心と態度とを一致させ、まごころと誠実さをもって話し行動しなさい84)。人は(こうして)自ら度脱し、次々に(他の人を)手助けすること

- 76) 至年長大、亦苦、亦極 『平』(295a19f.)は同じ。『無』(275c5)では「(生・死)・老・(病)痛苦」と変えられている。
- 77) 〈飢時、亦痛、亦苦、亦極。病時、亦痛、亦苦、亦極。〉 本経と『平』(295a20)の高麗蔵再雕本にはないが、本経と『平』の諸本にはある。『無』(275c5)にも「(生・死・老)・病痛」とあり「病の苦しみ」がある。
- 78) 死時、亦痛、亦苦、亦極 『平』(295a20)は同じ。『無』(275c5)では「(生)・死・(老・病)痛苦」と変えられている。
- 79) 甚惡臭處、不潔淨、了無有可者 『平』(295a20f.)の高麗蔵再雕本も同じ(他の版本・房山石経本には「惡臭處、不潔淨、……」とある)。『無』(275c5f.)では「惡露不淨、無可樂者」と変えられている。「臭處」は後にも「若曹亦可自決斷臭處惡露」(313b5f.)、「長生阿彌陀佛國、……亦無復有諸惡臭處」(313b14f.)と出る。この表現は仏典に多出する。「臭い場所；体の臭い部分」という意味以外に、「臭い；臭み；臭いもの」の意味になる場合も少なくない。Krsh (2010) 当該項および汪維輝「佛經詞語考釈四則」『浙江大學學報(人文社會科學版)』第35卷第5期(2005年9月)、157~159頁参照。「了」は「終」とおなじく後に否定語をともなって「まったく～ない」の意味。Krsh (2010)「了無」「了不」の項を参照。「可」は「よい」という意味。
- 80) 佛故悉語若曹 『平』(295a21)も同じ。『無』(275c6)では省かれている。
- 81) 若曹亦可自決斷臭處惡露 『平』(295a21f.)の高麗蔵再雕本のみ「若曹」を欠く。他の諸版本は本経と同じ読み。『無』(275c6)では「宜自決斷」と変えられている。「決斷」は「すっぱり断つ」の意味。訳注(八)注(124)を参照。「臭處」はここでは「臭さ」ではなく「体の臭い部分」の意味かもしれない。「惡露」は人体から出る排泄物、分泌物、月経、羊水などの意味(李 2004: 104-106)。女性に関する場合が多いが、男性のそれらの例もある(例えば、大正3巻, No.184『修行本起經』466b-10f.「難提和羅化作老人……惡露自出、坐臥其上。」。支婁迦讖訳『道行般若經』には本経と類似の表現がある:「與婦人交接、念之:“惡露臭處、不潔淨、非我法也。盡我壽命、不復與相近。”」(大正8巻, No.224, 455b20f.)。
- 82) 若曹亦可端心正身、益作諸善 『平』(295a22f.)も同じ。『無』(275c6)では「端身正行、益作諸善」と変えられている。「益」はここでは「大いに」の意味。訳注(三)注(51)を参照。
- 83) 於是常端中外、潔淨身體、洗除心垢 「洗除」(房山石経本も同じ)は宋版などでは「洒除」とある。『平』(295a23f.)の高麗蔵再雕本は本経のそれと一致するが、房山石経本には「於是常端中外、……洗除心垢」とあり、宋版には「於是常端中外、……洒除心垢」とある。『無』(275c7)では「修己潔體(v.l.淨)、洗除心垢」と変えられている。「潔淨」は同義字を重ねた表現。HD.6.117aには後漢代『論衡』などでの用例が挙げられている。「心垢」は「煩惱」のこと。仏典から始まる表現。
- 84) 自相約檢、表裏相應、言行忠信 『平』(295a24)も同じ。『無』(275c7)では「言行忠信、表裏相應」と変えられている。「自相」は「たがいに」の意味。訳注(三)注(85)、Krsh (2010) 当該項を参照。「約檢」は同義字を重ねた表現。「檢」(HD.6.920b参照)は「檢」と同音同義。「約檢」は辞書類には採られていないが、「約束・規則を守る、我が身をひきしめる」の意味か。HD.4.1341b.「檢約」(「引き締める、約束」の意味)を参照。本経の「適得其中、中表相應、自然嚴整、檢斂端直、身心清潔、無有愛欲、無所適莫(←貪)、無有衆惡瑕穢。」(311c7f.)、「當自端身、當自端心、當自端目、當自端耳、當自端鼻、當自端口、當自端手、當自端足、能自檢斂、莫妄動作、身心淨潔、俱善相應、中外約束、勿隨嗜欲。」(315c5f.)、

ができる<sup>85)</sup>。様々な愛欲を断ち、ひたすらに懸命に、退転することなく願いを追い求め、善き境涯（善道）への根本を固めよ<sup>86)</sup>。

### (阿弥陀仏国に生まれて、苦しみ・煩惱を離れる)

一生涯、精勵刻苦したとしても、それはわずかのあいだのことである<sup>87)</sup>。この世で善業をなし、来世には阿弥陀仏国に生まれて、まったく極まりのない快樂を得<sup>88)</sup>、明るさという点において覚りそのものと永久（とわ）に等しくなり<sup>89)</sup>、そのまま（その覚りを）よく保ち続け<sup>90)</sup>、永く悪しき境涯（悪道）の苦痛の憂いと悩みを離れ<sup>91)</sup>、苦しみと悪業の根源を抜きとり<sup>92)</sup>、愛欲と愛情とを断じて<sup>93)</sup>、とわに阿弥陀仏国に生まれ（住む）<sup>94)</sup>。（そこでは）苦痛もなく、またはや厭わしい臭みもなく、またはや苦しみも

↘「家室・内外・親屬・朋友轉相教語、作善爲道、奉經持戒、各自端守、上下相檢」(316a4f.)、「和順義理、歡樂慈孝、自相約檢」(316a7)と類似の表現が出る。「表裏相應」は本經の「適得其中、中表相應、自然嚴整、檢斂端直、……」(311c7f.; 訳注 [七], p.5)を参照。

- 85) **人能自度脱、轉相扶接** 『平』(295a24f.)の高麗藏再雕本も同じ。他の諸本には「…、轉自相接扶」とある。『無』(275c8)では「人能自度、轉相拯濟」と変えられている。「轉相」は「互いに」の意味もあるが、ここでは「次々に」の意味であろう。訳注(三)注(20)・訳注(五)注(96)・訳注(八)注(89)を参照。「扶接」は類義字を重ねた表現。HD.6.354bには漢代の『白虎通』などでの例が挙げられている。
- 86) **拔諸愛欲、精明至心、求願不轉、結其善道根本** 『平』(295a25f.)も同じ。『無』(275c8)では「精明求願、積累善本」と変えられている。「精明」は「純粹な真心で、ひたすらに」の意味。訳注(一)注(107)を参照。「善道」は仏典では Skt. *sugati* (よい境涯、よい生存、善趣)の訳語として使われている。訳注(八)注(46)を参照。
- 87) **雖精苦一世、須臾間耳** 『平』(295a26f.)には「雖精進苦一世、……」とあるが、本經の読みの方が本来的であろう。「精苦」は「精勵刻苦する」の意味で、仏典にしばしば出る。HD.9.218bには『世説新語』などでの用例が挙げられている。『無』(275c8f.)では「雖一世勤苦、須臾之間」と変えられている。この「勤苦」も「精勤刻苦する、苦行する」の意味。注(24)と Krsh (2010) 当該項参照。
- 88) **今世爲善、後世生阿彌陀佛國、快樂甚無極** 『平』(295a27f.)は「無量清淨佛國」となっている以外は同じ。「甚無」で「まったく～ない」の意味。訳注(五)注(100)を参照。『無』(275c9f.)では「後生無量壽佛(v.l.-)國、快樂無極」と変えられている。
- 89) **長與道德合明** 『平』(295a28)の高麗藏再雕本には「長與道合明」とあるが、他の諸本は本經と同じ。『無』(275c10)も本經と同じ。同じ表現はすでに出た(311c17)。訳注(七)注(75)を参照。
- 90) **然善相保守** 『平』(295a28f.)の高麗藏再雕本には「然善極相保守」とあり、他の諸本には「然善極相保」とある。『無』(275c10)では省かれている。本經の別の箇所にも類似の表現がある：「長與道德合明、自然相保守」(311c18)。訳注(七)注(76)を参照。
- 91) **長去離諸惡痛癢之臭處** 『平』(295a29)の高麗藏再雕本は同じ、他の諸本には「長去離諸惡痛癢之臭處」とある。『無』(275c10)では省かれている。「去離」は同義字を重ねた表現。HD.2.835bには漢代の『白虎通』などでの例が挙げられている。「痛癢」は注(74)参照。「憂惱」は同義字を重ねた表現。Krsh(1998).552, Krsh(2001).340を参照。
- 92) **拔勤苦諸惡根本** 『平』(295a29f.)も同じ。『無』(275c10)では「永拔生死根本」と変えられている。ここの「勤苦」は「苦しみ、苦しみを受ける」の意味。訳注(二)注(22), Krsh(1998).330, Krsh(2001).419f.を参照。
- 93) **斷諸愛欲恩好** 『平』(295b1)も同じ。『無』(275c10)では省かれている。「恩好」は、夫婦・家族・友人などの間の愛情・よしみ・むつまじさ。訳注(六)注(125)を参照。
- 94) **長生阿彌陀佛國** 『平』(295b1f.)の高麗藏再雕本・房山石經本は「長生無量清淨佛國」、その他の諸本には「長生無量清淨國」(誤写)とある。『無』(275c10)では省かれている。

なく<sup>95)</sup>、また姪欲・怒り・愚かさもなく<sup>96)</sup>、また憂いや嘆きもない。

**（阿弥陀仏国は涅槃の境地に近い）**

阿弥陀仏国に生まれれば、一劫、十劫、百劫、千劫でも万億劫でも<sup>97)</sup>、好きなだけ長生きしてとどまることができる<sup>98)</sup>。無数劫でも、計り知れない劫でも<sup>99)</sup>、好きなだけ長生きすることができる<sup>100)</sup>。食べたかろうと食べまいと、思いのままに、（食べ物）すべて自然に（現われ）、誰もがみな食べることができ<sup>101)</sup>、涅槃の境地に近い<sup>102)</sup>。

**（疑いをもつな）**

みなそれぞれ心の願いをひたすら追求しなさい<sup>103)</sup>。疑心や後悔を懐いてはならない<sup>104)</sup>。（阿弥陀仏国に）往生しようと欲するものは、その（疑心・後悔の）過失によって<sup>105)</sup>、阿弥陀仏国の端にある、自然の七宝でできた城で、五百年間処罰を受けないよ

95) 亦無有諸痛痒，亦無復有諸惡臭處，亦無復有勤苦 『平』（295b2f.）の高麗藏再雕本・房山石経本は同じだが、その他の諸本には「……亦無復諸惡臭處……」とあって「有」が欠落している。『無』（275c10）では省かれている。「痛痒」は注（74）参照。「臭處」は注（79）参照。

96) 亦無淫泆・瞋怒・愚癡，亦無有憂思愁毒 『平』（295b3f.）の高麗藏再雕本は同じだが、その他の諸本には「亦無有……亦無復有」とある。『無』（275c10f.）では「無復貪・悲・愚癡・苦惱之患」と変えられている。「淫泆」は「姪佚」「姪佚」とも書かれる。「憂思愁毒」は注（70）参照。

97) 欲壽一劫・十劫・百劫・千劫・萬億劫 『平』（295b4f.）の高麗藏再雕本は同じだが、その他の諸本には「……千劫・萬劫・億劫・萬億劫」とある。『無』（275c11f.）では「欲壽一劫・百劫・千億萬劫（v.l. 千萬億劫）」と変えられている。

98) 自恣意欲住止 高麗藏再雕本・房山石経本・聖語藏本などにはこうある。宋版などには「……住上」とある（誤写）。『平』（295b5f.）には「自恣若意欲住止（v.l. 上）」とある。『無』（275c12）では省かれている。「自恣意……」は「隨意……」と同じ意味をもつ古い表現。すぐ後には「恣若（←汝）隨意……」（313b19）とある。「住止」は「とどまる」という意味の同義字を重ねた表現。Krsh (1998). 606, Krsh (2001). 369, Krsh (2010) 当該項を参照。

99) 壽無央數劫・不可復計數劫 『平』（295b6）の高麗藏再雕本は同じだが、その他の諸本には「……不可復數劫」とあって、「計」を欠く。『無』（275c12）では省かれている。

100) 恣若（←汝）隨意皆可得之 『平』（295b6f.）の高麗藏再雕本も「恣汝……」とあるが、その他の諸本には「恣若……」とある。おそらく「恣若……」が本来的で、「恣汝……」は誤り。「恣若隨意」で「おもうがままに」の意味。本経の「皆有自然萬種之物，百味飯食……比如第六天上自然之物恣若自然，即皆隨意」（303c5f.）、「恣若隨意所欲好喜」（305c3）、「欲食不食，恣若其意」（313b19f.）および訳注（三）注（96）を参照。『無』（275c12）では「自在隨意皆可得之」と変えられている。

101) 欲食不食，恣若其意，都悉自然，皆可得之 『平』（295b7f.）も同じ。『無』（275c12）では「無爲自然」と変えられているが、これでは何のことか分からない。本経には「所居舍宅・被服・飲食都皆自然，皆如第六天王所居處」（301b5f.）、「皆有自然萬種之物，百味飯食。意欲有所得，即自然在前；所不用者，即自然去，比如第六天上自然之物，恣若自然，即皆隨意」（303c5f.）という類似の表現がある。「恣若其意」は「隨意」と同義。前注参照。「都悉」は類義字を重ねた表現。訳注（五）注（11），Krsh (2010) 当該項を参照。

102) 次於泥洹之道 『平』（295b8）・『無』（275c12f.）も同じ。訳注（三）注（72）を参照。「次」は「～に次ぐ，～より劣る」の意味であろう。訳注（六）注（70）参照。

103) 皆各自精明求索心所欲願 『平』（295b8f.）は同じ。『無』（275c13）では「汝等宜各精進，求心所願」と変えられている。「精明」は訳注（一）注（107）を参照。「欲願」は注（37）参照。

104) 勿得狐疑心中悔 『平』（295b9）は同じ。『無』（275c13f.）では「無得疑惑中悔，（自爲過咎）」と変えられている。「中悔」は訳注（六）注（36）参照。

105) 欲往生者，無得坐其過失 『平』（295b9f.）は同じ。『無』（275c14）では「（無得疑惑中

うにせよ<sup>106</sup>。』

阿逸菩薩は申し上げた<sup>107</sup>。

「仏の厳格明確で重要な教えを頂きました<sup>108</sup>。みなひたすら精進して、(教えの実現を) 追求します<sup>109</sup>。これを実行致したく存じます<sup>110</sup>。疑いなぞ懐くはずがありません<sup>111</sup>。』

### 略号表

注で使用した略号は次の通り：

GH = 『故訓匯纂』宗福邦・陳世鏡・蕭海波主編，北京2003（商務印書館）。

GHX = 『古代漢語虚詞詞典』中国社会科学院語言研究所古代漢語研究室編，北京1999（商務印書館）。

HD = 『漢語大詞典』，全13冊，上海，1986-1994（漢語大詞典出版社）。

Krsh (1998) = *A Glossary of Dharmarakṣa's Translation of the Lotus Sutra* 正法華經詞典, Seishi Karashima,

↘悔，自爲過咎』と変えられている。「坐」は「…によって，…のせいで」の意味。HD.2.1040b (15), ZXYL.683f., Krsh (2010) 当該項を参照。

106) 在阿彌陀佛國界邊自然七寶城中，謫五百歲 『平』(295b10)には「在無量清淨佛國界邊……」とある。『平』の高麗藏再雕本は本經と同じく「謫」とあるが，宋版・聖語藏・房山石經本などには「適」とある。「適」は「謫」に通じる（GH.2310a 参照）。『無』(275c14f.)では「生彼邊地七寶宮殿，五百歲中受諸厄也」と変えられている。上に「悔過者小差少，無所復及，其人壽命終盡，即往生阿彌陀佛國，不能得前至阿彌陀佛所，便道見阿彌陀佛國界邊自然七寶城中，心便大歡喜，便止其城中，即於七寶水池蓮華中化生，則受身自然長大在城中，於是間五百歲。」(310b5f.; 訳注 [六], p. 11) とあるのを参照。「國界」は「國」の意味。訳注 [六] 注 (46) 参照。

107) 阿逸菩薩言 『平』(295b11)は同じ。『無』(275c15)では「彌勒白佛 (v.l. 佛言)」と変えられている。

108) 受佛嚴明重教 『平』(295b11f.)は同じ。『無』(275c15)では「受佛重誨」と変えられている。本經の別の箇所です「受佛重教，請展轉相教，不敢違犯。」(316b21f.)とあるのを参照。「嚴明」は「厳格にして明確な，厳格公正」の意味。HD.3.545bには『後漢書』などでの用例が挙げられている。「重教」は辞書類に採られていない。

109) 皆當精進一心求索 『平』(295b12)の高麗藏再雕本は同じだが，他の諸本には「皆精進求索」とある。『無』(275c16)では「專精修學」と変えられている。

110) 請奉行之 『平』(295b12)は同じ。『無』(275c16)では「如教奉行」と変えられている。「請」は古い用法で，話し相手に対して尊敬を示す。例えば『論語・顔淵』「子曰『非禮勿視，非禮勿聽，非禮勿言，非禮勿動。』」顔淵曰『回雖不敏，請事斯語矣。』(回は賢くはありませんが，お言葉を実行致します)」。また古訳・旧訳仏典にしばしば出る「請問」は「質問申し上げます」の意味。GHX.434~435参照。

111) 不敢疑怠 『平』(295b13)の高麗藏再雕本は同じ。『平』の房山石經本は「不〇〇怠」と二字欠落して不明だが，おそらく同じ読み。『平』の聖語藏本には「不敢疑」，宋版などでは「不敢孤疑」と変えられている。『無』(275c16)では「不敢有疑」と変えられている。「不敢」は「はずがない」の意味。可能性がないことを示す。「疑怠」は辞書類にとられていないが，同義字を重ねた表現。「疑う」の意味。古く「怠」は「殆」に通じ，「疑う」の意味になることがある。HD.7.467b (4)には『公羊伝』での用例が引かれている。また支婁迦讖訳『道行般若經』にも「汝設見，慎莫疑，慎莫怠。」(大正8巻，No.224, 472a11)とあり，それを支謙は「若所聞見，慎莫疑殆 (v.l. 疑怠)。」と変えている(大正8巻，No.225『大明度經』，504c1)。HD.8.514aには『史記』における「疑殆」(疑う)の例が引かれている。

- Tokyo 1998, The International Research Institute for Advanced Buddhism, Soka University (Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica I).
- Krsh (2001) = *A Glossary of Kumārajīva's Translation of the Lotus Sutra* 妙法蓮華經詞典, Seishi Karashima, Tokyo 2001, The International Research Institute for Advanced Buddhism, Soka University (Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica IV).
- Krsh (2010) = *A Glossary of Lokakṣema's Translation of the Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā* 道行般若經詞典, Seishi Karashima, Tokyo 2010, The International Research Institute for Advanced Buddhism, Soka University (Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica XI).
- Zhu = 朱慶之『佛典與中古漢語詞彙研究』, 台北 1992 (文津出版社).
- ZXYL = 董志翹・蔡鏡浩『中古虛詞語法例釋』, 長春 1994 (吉林教育出版社).
- 『平』 = 『無量清淨平等覺經』
- 『無』 = 『無量壽經』
- 訳注 (一) = 辛嶋静志『『大阿弥陀經』 訳注 (一)』『佛教大学総合研究所紀要』 第6号 (1999), pp. 135-150.
- 訳注 (二) = 辛嶋静志『『大阿弥陀經』 訳注 (2)』『佛教大学総合研究所紀要』 第7号 (2000), pp. 95-104.
- 訳注 (三) = 辛嶋静志『『大阿弥陀經』 訳注 (三)』『佛教大学総合研究所紀要』 第8号 (2001), pp. 133-146.
- 訳注 (四) = 辛嶋静志『『大阿弥陀經』 訳注 (四)』『佛教大学総合研究所紀要』 第10号 (2003), pp. 27-34.
- 訳注 (五) = 辛嶋静志『『大阿弥陀經』 訳注 (五)』『佛教大学総合研究所紀要』 第11号 (2004), pp. 77-96.
- 訳注 (六) = 辛嶋静志『『大阿弥陀經』 訳注 (六)』『佛教大学総合研究所紀要』 第12号 (2005), pp. 5-20.
- 訳注 (七) = 辛嶋静志『『大阿弥陀經』 訳注 (七)』『佛教大学総合研究所紀要』 第13号 (2006), pp. 1-11.
- 訳注 (八) = 辛嶋静志『『大阿弥陀經』 訳注 (八)』『佛教大学総合研究所紀要』 第14号 (2007), pp. 1-17.
- 李 2004 = 李維琦『佛經詞語匯釋』, 長沙 2004 (湖南師範大学出版社).

(からしま せいし 創価大学国際仏教学高等研究所)

2009年12月25日受理

